文化

堀内民一の大和万葉（その二）

なら民俗通信 262

西村　博美

葛城山に四季の思いを

▼『大和万葉風土記』の三著

堀内民一には、『大和万葉風土記』という同じ表題を持つ三つの著作がある。

一冊は昭和十八年に（以下「旧稿」という）、続いて版を改め「新稿」と冠したもの（同二十七年）、さらに「定本」（同三十七年）がほぼ十年をおいて出されている。それだけをみても堀内が万葉に、もう少し精確にいえば、「大和の万葉の風土」に寄せる思いの深さのようなものをうかがうことができる。

さらにいま、私の手もとにある「新稿」と「定本」を比べて、その内容がまったく異なっていることに気づかされる。「定本」とは、旧版を多少改稿するなりしたものをいうのが、一般的な理解であろう。

▼大和広瀬の河合

堀内民一は、大和広瀬の河合の人だが、

「広瀬川　袖つくばかり浅きをや　心深めてわが思へるらむ」（万葉集・巻七）

の歌を引いて「歌の風土」を記している。

「大和平野の川が大和川に落ち合うところが広瀬の川合である。葛城川、曽我川、飛鳥川、富雄川（富の緒川〈おがわ〉）などが川合で合流する。ここに広瀬神社がある」（堀内『大和万葉』）。

晩年の堀内民一（『まほろば』17号）1974年3月

大和の諸々の川が行き合い交わるところ、まさしく「河合」の地は、また水田をうるおし、風の神に五穀を稔らせることを願う祭りの場でもあったという。

「風（かぜの）神（かみ）を龍田の立野に祀（まつ）らしむ。〔……〕大忌（おほいみの）神（かみ）を広瀬の河曲（かはわ）に祀らしむ」（『日本書紀』「天武紀」）。

幼年時からの堀内の大和古代の風景は、このようなところからも立ち上がってくる。

ある日の堀内は、ここから少し行った丘の上から、大雪がふりつもった葛城山をながめたとき、古き倭（やまと）舞（ま）いの手ぶりに歌われた古歌が口をついて出たという（堀内『飛鳥の道』）。

「しもとゆふ　かづらきやまに　ふる雪の　まなく時なく　おもほゆる哉」〔あのかずらき山に、常住降っている雪ではないが、すきまなく、君のお姿が思われることよ〕

「川堤の柳の若い枝を切って、幼い太刀をつくり、遊び廻った法隆寺詣の道のほとりの小川。〔……〕川のむかふには葛城も二上も、法隆寺も見えてゐた」（「はるやなぎ葛城山」『新稿』）。

▼油菜の花漬

与謝野晶子も葛城を歌っている。

「やや黄ばむ油菜のさき見るごとく夕月にほふ葛城の山」。

堀内は、そんな季節になると、折口信夫の家の者に何気なくつぶやいたということばを思い出すのだという。「口の中で花粉が散って拡がるようだ」。菜の花の二、三寸を摘んで漬けたのを食べながら、そう言ったのだと。いや、もっと折口ふうに言えば、「拡がってくるようやなあ」だったかもしれない。

堀内はまた別のところで、「三月も二十日過ぎて法隆寺会式（えしき）のころになると、葛城の小野をわたる夕風もなまめいてきて、油菜の先が黄いろくほぐれだす。当麻（たいま）、櫛（くじ）羅（ら）、森脇（もりわき）、長（なが）柄（ら）、高天（たかま）、朝妻（あさつま）、鴨（かも）神（かみ）、風の森の峠にかけて、菜の花がその山原にも、村の辺にも咲き出す。そういう早春の葛城山に立つ雲が美しい」と記している（『大和万葉――その歌と風土』）。

「春（はる）楊（やなぎ）葛城山に立つ雲の立ちても坐（ゐ）ても妹（いも）をしぞ思ふ」（『万葉集』・巻十一）。

川が寄り集まる大和国原（くにはら）の盆地の底から、少しずつ上り坂になる峠道にかけてのあたりは、他所にくらべて菜の花の春が少し遅れてやってくるのかもしれない。

「菜の花も咲いているし、彼岸桜も咲いてゐるといふのに、この朝の寒さ――」と堀内は書く（『新稿』）。

私も毎年のそんな春の日に、法隆寺の「会式」へ母や家の人に連れられて行ったのを思い出す。堀内民一が故郷から眺め慕った葛城も、それに続く金剛の峯も母の里に近く、また私の山でもあった。

葛城山（九五九・七㍍）の南に水越峠をはさんで対する金剛山（一一二五㍍）は明らかに別の峰であるが、古くは葛城、金剛のすべてを含めて葛城山であり、昔はそのさらに北にある二上山までが葛城山であったという。

（和田嘉寿男『大和の万葉』）。

そのことは、「大津皇子の亡骸（なきがら）を、葛城の二上山に移葬し奉つた時、大伯皇女（おおくのひめみこ）の御歌二首」（巻二）とある歌の題詞によっても知ることができる。

（詩人、奈良民俗文化研究所研究員）

……

堀内　民一（1912～1971）、国文学者、文学博士。